

DNA通信

《内容》 3/26 シンポジウム報告 / A I 試論・第一回 / 映画紹介 / 次回イベント案内 / ほか

●**シンポジウムのご案内**（詳細は 11 頁をご覧ください）

■テーマ：PFAS が脅かす食と暮らしー暮らしの隅々に入り込む危険な物質の正体ー

■講師：藤原寿和さん、天笠啓祐さん

■日時：2026 年 5 月 28 日（木）13 時 30 分～

■場所：東京ボランティア市民活動センター会議室 B

■資料代：300 円

NO.171 2026 年 5 月 14 日発行



DNA 問題研究会

e-mail : d_monken@yahoo.co.jp

[https : //dnamondaiken.wixsite.com/mysite-3](https://dnamondaiken.wixsite.com/mysite-3)

〒 191 - 0061 日野市大坂上 3 - 21 - 18 洪方

郵便振替：00140-8-605520 年会費：3000 円

映画『失われた時の中で』ベトナム戦争の傷跡は今も続く

2025年3月26日、飯田橋の市民ボランティア活動センター会議室にて、ゲノム問題検討会議との共催で、映画の上映とトークイベント「ベトナム戦争の傷跡は今も続く——なぜ罪のない市民が苦しめられるのか——」を行った。冒頭約一時間、映画『失われた時の中で』の上映の後、天笠さんの講演、ダイオキシンの農薬の危険性の話につづいて、司会の島蘭進さん（東大名誉教授）、映画制作者である坂田雅子さん、天笠さんの三名との座談会が行われ、質疑応答。会場には、ベトナム反戦世代の方もおられ、活発な議論が続いた。参加者は約40名だった。

映画『失われた時の中で』について

上映したこの映画はどのようなものか。

1960年代初頭、ベトナム戦争の下で、米軍はベトナムに枯葉剤を散布した。その影響はベトナムの人々だけでなく、アメリカ人をはじめとしたベトナム帰還兵とその家族にも及んでいる。

ベトナム戦争のさなか、アメリカはジャングルのゲリラに苦戦し、枯れ葉剤の散布を始めた。生い茂るジャングルの葉を枯らし、ゲリラの隠れ場所をなくすためだった。戦争の拡大に伴って散布は増大し、南ベトナムの土地の多くが汚染され不毛の地となった。

枯れ葉剤には猛毒のダイオキシンが含まれていた。ダイオキシンは半永久的に環境に留まり、様々な形で人間の健康障害を引き起こす。枯れ葉剤は敵味方を問わず、ジャングルに降り注ぎ、数百万人が影響を受けた。その被害は子供や孫の世代まで続いている。（『失われた時の中で』パンフレットより。）

『失われた時の中で』の監督である坂田雅子さんの夫で写真家だったグレッグ・デビスさんも枯れ葉剤の被害者、その一人だった。1967年から1970年の3年間、南ベトナムに駐留していたグレッグさんは、2003年4月に胃の不調を訴え入院、その2週間後に帰らぬ人となった。肝臓がんだった。

愛する夫との突然の別れ、その理由がベトナム戦争時の枯葉剤被害にあるのではないかと聞かされ、彼の身に起こったことを知りたい一心でカメラを手にベトナムに向かう。当時、彼女は55歳。手探りで始まった映画作りだったという。

これまで一貫して、枯れ葉剤の影響で障害がある状態で生まれてきた子どもの姿を追ってきた。08年公開の一作目『花はどこへいった』では、都市部で共同生活する子どもたちや、必要な医療を受けられていない農村部の家族取材した。11年の第二作目『沈黙の春

を生きて』では、帰還兵の娘で、障害がある米国人女性とともにベトナム人の被害者に会った。2人の交流を通して、枯葉剤の影響を受けた両国の人々の心情を浮かび上がらせた。第三作目、『失われた時の中で』では、夫の死をきっかけに訪れたベトナムで坂田雅子監督が出会った様々な枯葉剤被害者の過去と現在の姿が映し出されている。

1986年に治療のために来日したベトちゃんドクちゃんのように、戦後50年を目前にしたベトナムでは今なお、枯葉剤の影響と思われる重い障害を持った子どもたちが生まれている。彼らの子や孫の世代にも、無脳症、小脳症、二分脊椎症、先天性四肢欠損症、知的障害、遺伝性疾患やがんなど、重篤な身体的・精神的疾患のある子が多く生まれている。坂田さんが枯葉剤被害の取材を始めてから20年たつが、後を絶たないのだ。それは高濃度のダイオキシンを含む枯葉剤の影響である可能性が高く、新たな毒性も明らかになりつつある。ベトナム政府によれば、被害は三代目、数百万人に及ぶという。

年齢を重ね、体力的にも精神的にも負担が増す中で、障害を抱えた子どもとの将来を悲観する両親。障害を抱えた家族をこれから支えていかなければいけない少女。障害がありながらも、自らの力で人生を切り拓き、自立して生活している若者たち。アメリカ政府と枯葉剤を製造した企業に対する裁判を起こした元ジャーナリストも登場する。それぞれの人生を見つめ、枯葉剤によって失われた時の中を生き抜いてきた人々の姿を静かに描き出している。いまでもつくベトナム戦争の傷跡は、枯葉剤を開発した企業、米政府および米軍の犯罪であることは明白だがしかし、枯葉剤の影響が広く世

界に知られるようになった今日も、米政府は枯葉剤による人的被害の補償責任を負おうとはせず、製造した米国の大企業も同じ対応だ。まったくやりきれない話である。

●奨学金制度について

坂田さんは10年に「希望の種」という奨学金制度を設立し、仲間たちと運営している。枯葉剤被害者の子やそのきょうだいたちが学校に通うための支援をしているのだ。集まった寄付は一千万円以上。100人以上の子どもたちが、上の学校に通えるようになった。

現在もこの基金は坂田雅子さんの公式サイトを通じて寄付を受け付けているので、関心のある方はご覧ください。

▼公式サイト…坂田雅子公式サイト (Masako Sakata Official Website)

「奨学金 希望の種」のページでは、現在支援を受けている学生の様子や、これまでの活動報告、寄付の振込先などが掲載されている。

(村上茂樹、会員)

AI 試論・第一回

いまや社会の主役になりつつ AI であるが、表面的、現象面で見えるところ、本質的、深層面で見える世界の間には、千里の径庭がある。この AI について、十のポイントを挙げ、この問題の本質に迫ってみた。

その十のポイントとは、次のようなものである。一、経済活動の急速な情報依存をもたらし、それが個々人の好みや行動、思考までも管理するようになった。二、個人や団体の未来まで予測し、それが時にはその個人の未来まで管理し、時には奪うことになった。三、情報を得ることは、情報を売り渡すことでもある。その売り渡した情報で社会は動くようになった。四、情報依存症が広がり、それが大衆操作を容易にすることになった。五、人間労働が次々と機械に置き換わり、いまや知的労働までもが置き換わりつつある。六、最近とくにクロースアップされているのが軍事技術の変化で、戦争をより悲惨なものにしている。七、富の偏在を顕在化し、一部の個人・企業に世界中の富が集中するようになった。八、膨大なデータ労働と呼ばれる底辺労働を作り出し、国際的な分業と貧困を固定化するようになった。九、半導体技術や生産を変え、レアアースの奪い合いをもたらし、先住民の居住を奪い、地球環境を破壊している。十、政治を変え、地球を変えつつある。

今回はその一回目で、第一と第二のポイントを見ていくことにしよう。

第一のポイント。経済活動の急速な情報依存をもたらし、それが個々人の好みや行動、思考までも管理するようになった。

AI の経済活動への応用の出発点は一九八〇年代の S I S (戦略情報システム) に始まるといつてもいい。さらにさかのぼると、S I S の原点はトヨタ生産システムである。「必要とするものを必要とするときに」ということで、在庫ゼロにするのがトヨタ生産システムの基本である。それをセブンイレブンも基本とした。そのため売り上げが瞬時に分かり、すぐ補充する仕組みが作られた。また商品を購入する際に、レジの担当者が性別や年齢を判定して打ち込み、その情報が集積されることで、どの店舗で、どのような人がどのような商品を購入するかという情報が集積され、新たな商品開発や店舗のレイアウトが変更されていく。こうして店のレイアウトも、購入者の動線を分析して作られていった。

いま、それ等の分析がすべて機械に置き換わっている。例えばレジの担当者が打ち込んでいた情報が顔認証に代わるなど、情報の量も質も大きく変わってきた。しかし、その本質はトヨタ生産システム、S I S と変わらない。

では何が変わったか。さらに細かい情報が入手できるようになり、さらに多くのことが分かるようになってきたのである。例えば、服装などから好みの色が判断され、そこから好みの色と好みの商品の関係が判断されるといったことである。それは膨大な量が蓄積されているクラウドの情報に基づきAIが分析する。これはAIが最も得意とする分野である。しかし、情報が収集されていることを客は知らない。これはプライバシーが知らないうちに冒されていることを意味する。

第二のポイント。個人や団体の未来まで予測し、それが時にはその個人の未来まで管理し、時には奪うことになった。

いま未来予測が広がり、その正確さが増している。その予測と管理を国が行うとどうなるだろうか。いま国が目論んでいる予測と管理の一つに、国民の健康や病氣管理と支配がある。全国民の健康・医療を生涯にわたって管理しようというものである。それは国の管理が、国民一人一人の生涯わたる健康や病氣に及ぶことを意味する。

政府は国民一人一人を詳しく管理するため、マイナンバーカードと健康保険証の一体化を急がせた。マイナンバー制度は、国民すべてに番号を付ける「国民総背番号制」であり、国が全国民の預金など財産を掌握し、監視を強化して思想チェックや犯罪防止を行い、国民一人一人の病氣や健康の管理を行うために取り組んできたものである。健康保険証との一体化では、その病氣や健康の管理とともに、顔認証にも狙いがある。いま世界的に顔認証が普及している。ビルや部屋の入退室、買い物などさまざまな分野で導入されている。国民一人一人の行動までもが管理されていく。それを普及する狙いもある。

さらに病院では、あらかじめ採取された血液や尿を解析した結果や、

これまでの診察情報に基づき診察が行われる。その診察は、人ではなく機械に置き換えることができる。医薬品もAIが指示する。血液は個人情報宝库である。採取された血液や細胞などの生体試料を用い、クラウドに集積されているビッグデータからAIが解析し、病氣以外にも、スポーツ選手に向いているか、軍人に向いているか、どんな職業が向いているか、未来の姿はどうなるかまで予測できる。一人一人にとっては、決められた人生を送ることを強制される。

全国民の生涯にわたる健康や病氣の管理であるが、民間企業や自治体などと連携して、最終的には出生前後から終末期を迎えるまで生活思想、健康などの管理を目指している。これは「ライフコースデータ」と呼ばれ、この実現に最も積極的なのが日本経済団体連合会（経団連）である。

それによると、妊娠から出生前後までは母子手帳のデータを収集する。次に学校に通い始めると学校健診の情報を収集する。卒業後は、健康診断のデータや、病院などを受信した際の電子カルテ、薬手帖のデータなどを収集する。そして最後は、要介護認定調査情報や施設入所時調査情報を収集し、それらを連結する。そのすべて繋げるのに、マイナンバーが役立つことになる。

このようにして、ゆりかごから墓場までの健康管理が可能になる。この墓場に至るまでの全国民の健康や医療にかかわるビッグデータの利活用で、注目されているのがゲノム情報解析との連携である。ゲノム情報の大規模な研究が、ゲノムコホート研究で、産官学連携で進められてきた。この連携が進めば、全国民の健康や医療の管理が、さらに世代を超えて受け継がれていくことになる。遺伝子の管理は、家系管理へとつながることができからである。（天笠啓祐、会員）

『核の傷…肥田舜太郎医師と内部被曝』を観て

この映画の撮影時89歳、元気に診察を続けている肥田先生の姿が映し出される。患者さんに対してあくまでもやさしい。高齢になった被爆者の人達は、がんや心臓病などさまざまな病気に罹患しているが、放射能が原因だと証明する手立てがないと先生はくやしがる。第2次世界大戦末期、医師・肥田舜太郎さんは広島陸軍病院で働いていた。少し離れたところで被爆したが、そのまま治療に当たった。爆心地にいた人だけではなく、直接爆撃や衝撃波を受けていない人や、後日になってから被災地に入った人など多くの人達が次々と原因不明の死を遂げていく姿を目の当たりにする。当時は原子爆弾が投下されたという事も、放射能についても何もわからないまま、どんどん運び込まれてくる傷ついた人達の治療に明け暮れていた。落着いてから帰郷したら、自分の葬儀が終わっていたという。

アメリカは広島市内で多くの人が屋外に出ている時間帯を調べ、被害が1番大きいと思われる8時15分に原爆を投下した。そして原爆投下後すぐに広島に入り調査を開始する。日本人の医師や研究者には調査も研究も許されなかった。1950年にABC（原爆被爆調査委員会）の研究所が広島に建てられ、1000人規模の研究がアメリカから派遣された。多くの日本人が雇われたが日本人は研究者であつても雑用係でしかなかった。当初、被爆した人達は期待を持ってそこを訪れたが、裸にされ、乱暴に扱われ、だんだん

来なくなつた。いやがる被爆者を処罰すると脅かして集めて検査し、黙々とデータをとり続けた。悲惨な状況にある人々を目の前にしながら、患者としてではなく、放射能研究の資料としただけで、治療は一切行なわなかつた。治療すれば戦争加害を認めることになってしまうという事で。遺体はアメリカに送られて研究された。戦後、遺体返還運動が起こつたが、臓器はバラバラで粗末に扱われ、誰の物かわからない状態で返されてきたという。人間としての尊厳をもつて扱われることはなく、動物実験の延長のようだったと先生は語っている。後年、原爆投下後のさまざまなデータは隠匿されていたことが判明する。その成果は自国のためだけに使つた。その事も含め、ABCの行いは決して許されることではなかつた。

内部被爆の実態は隠し続けられ、ロックフェラー財団、メロン財団などが巨額の投資を行ない、原子力発電所を作り続けた。多くの人を被爆させ続け、周辺の住民にがんが多発した。それは全米だけではなく欧州各国にも広がった。より多くの爆弾が欲しかった軍部、核兵器を戦争の抑止力と考え、近い将来石油資源は枯渇すると考えていた政府の考えが合致し、原発は推進されていった。低線量被爆についての研究が発表されたのは1970年代後半、アメリカのウェスティングハウス社・原子力開発研究所の元研究者・スタンダラス博士によってであつた。もともと原発の研究の第1人者であつ

たA B C Cの研究には不備が多く、間違いもあったとスタングラス博士は指摘している。米政府は住民の被害を無視し続けた。原爆実験で死の灰を被った先住民への賠償を拒否したが、最終的には議会が認めることになった。日本でも広島長崎だけではなく、原爆投下後のがんの発生率は全国的に上昇したと博士は告発している。それまで内部被曝についての見識はまったくなかったため、空中や水中に広がった放射性物質を吸い込むことによって長年にわたり細胞膜やDNAが傷つけられるという事実は隠され続けてきたが、肥田先生が長い間被爆者の治療に当たって肌で感じていたことが証明された。

以前、病院勤務の頃、レントゲン技師から聞いた話がある。レントゲンで使うX線フィルムは薄い紙に挟まれて保護されているが、1954年のビキニ環礁での水爆実験の後、その紙の原料になる樹が放射能を浴びたので、フィルムが被爆して、水玉模様になってしまっ、て、使い物にならなかつた時期があつたと。アメリカは海や砂漠に放射能をまき散らした。

現在、アメリカのイラン攻撃によってホルムズ海峡は封鎖され、原油の供給不足が世界中の人々の命や生活を脅かしている。そんななか「日本は原発を残しておいて良かった」と言い出している人がある。再生エネルギーの利用や技術転換により、省エネルギー化が進んでいることにも目をつぶり続けている。核を使い続け、持ち続けること、核の平和利用なんてあり得ないと改めて思った。

肥田先生は医師として治療や研究に当たただけではなく、被爆者の人達と一緒に核廃絶運動にも関わり続けた。このドキュメンタリーを観て、現在トランプ政権が行なっていることは、当時のアメ

リカの姿勢と全く変わらないと感じた。(洪美珍、会員)

(2006年制作のドキュメンタリー映画、現在VOD、U-NEXTで配信中)



◆シンポジウム資料◆

七三一部隊を改めて振り返る／七三一部隊・石井四郎と
は何者か？(2)

阿部海

さて、一九二四年当時の日本では「ウイルス」という語がまだ使用されていませんでした。ですから、石井四郎も含めた当時の医学者らは、濾過後に濾液の中に残る感染力を備えた何かを「濾過性病原体」という曖昧な語で呼び、その概念も輪郭のはっきりしたものではありませんでした。この「濾過性」、「filterable」という語は、液体から病原体を濾過できるという意味ではなく、濾過しても病原体が濾液の中に残るという意味でした。何かが細菌濾過器を通してため、「濾過性病原体」と呼ばれたのです。当時石井が執筆した論文から、彼が、この「濾過性病原体」という語を使用することで、濾過しても濾液に残る感染力のある何かに気がついていたことは明らかです。しかし、まだそれが何かということを、彼は明確な概念として認識できていませんでした。

石井が、「ウイルス」という語を使用するようになるのは戦後になってからの話です。「濾過性病原体」と言っても、それが即「ウイルス」を意味したわけではなく、多くの学者が、濾過後に濾液の中に残る感染力のある何かを「微小な細菌」だと考えました。当時の石井の論文、例えば彼の博士論文、「グラム陽性双球菌の研究」を読んでも、彼が「細菌」と「ウイルス」を明確に区別している形跡はありません。ですから、彼が「とうとうまあウイルスである」ということが承認されまして」と述べるのは奇妙という他ないの

です。

さて、一九二四年に、香川県で猛威をふるった謎の「ねむり病」に戻りましょう。これは恐ろしい疾病でした。八月一六日、愛媛県松山市の道後湯之町松ヶ枝町遊郭で、老女が「嗜眠性脳とうごゆのまちまつがえちよう炎」と診断され命を落としました。この患者を診察した医師は、「頭部にも腹部にも異常がなかったので、こんな病状で外に付ける病名もなかったから嗜眠性脳炎の病名をつけた訳です」とほか語っています。しかし、これは誤解という他ありません。当時、一般に「嗜眠性脳炎」と呼ばれていたのは、また別の疾病だったからです。日本語の「嗜眠性脳炎」は、“Encephalitis lethargica”の訳語です。この疾病は、一九一七年に、オーストリアの神経学者、コンスタンティン・フォン・エコノモによって報告されたことから「エコノモ型脳炎」とも呼ばれます。それは一九一六年冬から翌年にかけてオーストリアのウィーンに突如流行した原因不明の脳炎のことで、一九一八年以降、ドイツ、イギリス、北アメリカへと流行が拡大するに至りました。この疾病にかかった場合、患者がいかなる症状を示すかについては、先程のポートの著作から引用させていただきます。

「嗜眠性脳炎は、しばしば『流行性脳炎』とも呼ばれ、現在でも原因は不明である。それは様々な症状を示し、一九一六年から翌年までウィーンに起こった流行がなければ発見されなかったであろう。症状の重複が多いにもかかわらず、目立った臨床パターンが三つ認められた。第一のパターンは、しばしば「睡眠病」と呼ばれ、頭痛、発熱、上気道炎など様々な症状で始まる。患者は次

第にうとうと眠くなり、やがて深い眠りに入っていく。患者を眠りから覚ますのは容易である。しかしながら、刺激がなくなる
と患者はすぐまた深い眠りに戻り、そこから昏睡状態に陥り、最終的に死ぬこともしばしばである。第二のパターンは運動過多と呼ばれ、しばしば筋群の痙攣や引き攣りを示す。典型的な初発症状は、首や背中の激しい痛み、筋肉の脱力感、不眠である。第三の、最も特殊なパターンは、しばしばパーキンソン病の患者に見られる動作緩慢の要素を示す」。

日本では、一九一九年に、長野県、新潟県など各地で嗜眠、眼瞼下垂、複視などの症状を示す疾病の流行が確認され、嗜眠性脳炎として報告されました。しかし、日本で流行したこれらの疾病が、エコノモの報告した脳炎と同一だったかどうかには異論の余地があります。ただ現在はいきりしているのは、一九一七年にエコノモが報告した嗜眠性脳炎と、一九二四年に香川県で猛威をふるった「嗜眠性脳炎」が同一の疾病ではなかったということです。後者に関しては、後に蚊（コガタアカイエカ）が媒介するフラビウイルスによって引き起こされる脳炎だったことが明らかになり、現在では「日本脳炎」（学名“encephalitis japonica”または“Japanese B Encephalitis”）という名称で呼ばれています。しかし、石井は戦後になってもなお、一九二四年に香川県で京大研究班が調査した疾病が「嗜眠性脳炎」だったと理解していたし、それがウイルス性の疾病であることを自分が看破したと豪語していました。押さえておかねばならない点は、この疾病が「嗜眠性脳炎」でなかったこと、そして石井がその疾病がウイルスによって引き起こされることを発見

した人物ではないことです。この脳炎のエピソードは、石井四郎の人格を考える上で重要なだけでなく、彼が発明したと伝えられる「濾水機」を見ていく時にも重要になってきます。それについては後ほどお話しさせていただきます。面白いのは、常石敬一氏のように、石井四郎について優れた著作をものしている人物でさえ、石井が、一九二四年に香川県で流行した「嗜眠性脳炎」を「ウイルス性」と特定した人物だと信じ込んでいたところです。常石氏は、彼の晩年の著作、「七三一部隊全史」に至ってもなおこの認識を放棄しませんでした。しかし、こうした石井の発言を鵜呑みにする態度は、今後の研究では厳しく改められねばならないと思います。

石井四郎の結婚

さて、先へ進みましょう。

当時、京都帝国大学の総長は、医学者の荒木寅三郎という人物でした。石井は、自らが「嗜眠性脳炎」と思い込んでいた疾病に関する研究の根回しで荒木の官舎をたびたび訪問するうちに、彼の娘、清子に惚れ込み、総長に結婚を懇願しました。そして、博士号を授与された一九二七年、石井は、清子との結婚に至ります。この時、荒木寅三郎の娘婿となったことで、石井は、京都帝大総長の後ろ盾を得たことになります。

石井四郎の海外出張

一九二八年四月、石井四郎は、妻子を日本に残して謎の欧米旅行に出発します。通常、この時の石井の海外出張は、細菌戦の情報収集のための視察旅行ということになっています。当時彼が訪問した

国々は、シンガポール、セイロン、エジプト、ギリシャ、トルコ、イタリア、フランス、スイス、ドイツ、オーストリア、ハンガリー、チェコスロバキア、ベルギー、オランダ、デンマーク、スウェーデン、

ノルウェー、フィンランド、ポーランド、ソ連、エストニア、ラトビア、東プロイセン、カナダ、アメリカ本土の二五カ国です。常石敬一氏の「七三一部隊全史」では、二四カ国となっています。これは、戦後石井が、アメリカから来日した調査官、アーヴォ・トンブソンという獣医に提出した書類に記されています。一九四二年から四五年まで、七三一部隊で一時石井に代わって部隊長を務めた北野政次「軍医中将」は、戦後米軍に対して、石井が、「はじめは私費留学として渡欧し、後半に公費に切り替わった」と述べていますが、一介の軍医が、一九二八年にこれらの国々を訪問したというのであれば、ただ驚かされるばかりです。しかし、この海外出張で、石井が、先程述べた国々を訪問した証拠書類は何も残されていません。石井が出張したと証言し、北野がそれを裏付けているだけです。ここは、石井四郎の生涯と発言を見てゆく時に、なかなか評価し難い部分ですが、この海外出張を疑う根拠はいくつかあります。石井の理屈には穴があり、少なくとも、彼が二五カ国を視察して回ったことに疑いを抱かせる材料がいくつかあるのです。

まず、当時の欧州大陸の鉄道網を考えてみましょう。例えば、石井はフィンランド、エストニア、ラトビア、ポーランドを訪問したと主張しています。ですが当時、鉄道でフィンランドからエストニア、ラトビアを通じてポーランドへ行くには、リトアニアを経由する必要があります。石井はリトアニアを訪問したと述べておらず、彼がリトアニアを訪れたことを示す証拠書類もありません。彼は、

なぜ自らが訪問した国々からリトアニアを除去したのでしょうか？ 忘れていたのか、それとも嘘をついていたのか？ ここは奇妙な部分です。

私は、当時石井がベルリンに暮らしていたのでは、と思っています。それは、宮本百合子の小説で、石井をモデルにした人物がベルリンに暮らしていたことが描かれているのと、S・S・マジエスティック号という遠洋定期船で、石井がシエールブルからニューヨークへ渡航したとされる乗船名簿に、彼がベルリンに滞在していたことを示す記載があるからです。ただ、これらも、「石井四郎がベルリンに暮らしていた」ことを証明する証拠としては弱いと思っています。前者は小説の話だし、後者に関しては本物の乗船名簿かどうかまだはつきりしていないからです。偽造されたものかもしれません。石井四郎のこの海外出張は、いまだに謎の霧に包まれたままです。

(つづきは次号で)

DNA 問題研究会シンポジウム

PFAS が脅かす食と暮らし

—暮らしの隅々に入り込む危険な物質の正体—

永遠の汚染物質といわれ、人体や生態系への悪影響が指摘されている PFAS（ピーファス）ですが、フッ素樹脂製造工場や産廃処理場、基地など様々なところを汚染源として、河川や地下水を汚染しています。しかし、汚染源はそれだけではありません。私たちの暮らしの中にも、フッ素樹脂のフライパンや、防水・防汚の衣類、食品包装、カーペット、化粧品、農薬などに含まれ、体内汚染をもたらしています。

また、半導体の製造時に PFAS が使われており、政府は、世界最大の半導体受託製造企業である TSMC 新工場を熊本県に誘致し、さらに国家戦略として世界最先端の半導体を開発・製造・販売するラピダスの北海道の工場を支援し、汚染を拡大させようとしています。

今回は、暮らしの隅々に入り込む危険な物質の正体を明らかにし、PFAS が脅かす食と暮らしを考えたいと思います。講師として、40 年あまり東京都職員として環境行政に携わり、全国で廃棄物問題などの環境問題に取り組み、いま半導体問題に取り組んでいる藤原寿和さんに、半導体製造と環境問題と人権問題を語っていただきます。天笠啓祐さんには暮らしの隅々にどこまで PFAS が入り込みどこまで危険な物質なのかをお話いただきます。

＊

日 時：2026 年 5 月 28 日（木）13 時 30 分～16 時 30 分 開場 13 時

テーマ：PFAS が脅かす食と暮らし—暮らしの隅々に入り込む危険な物質の正体—

場 所：東京ボランティア市民活動センター会議室 B

東京都新宿区神楽河岸 1-1 飯田橋セントラルプラザ 10 階

JR 総武線・東京メトロ副都心線 飯田橋駅下車すぐ 飯田橋駅西口を出たら右

講 師：藤原寿和さん

廃棄物処分場全国ネットワーク、止めよう！ダイオキシン汚染・東日本ネットワーク、有害化学物質削減ネットワーク、化学物質問題市民研究会、ダイオキシン・環境ホルモン対策国民会議、日台油症情報センター、千葉県放射性廃棄物問題を考える住民連絡会などで活動。

天笠啓祐さん DNA 問題研究会員 『フッ素の社会史』（地平社）の著者

参加費：300 円（現地参加費） 後日期間限定の逃がし発信あります。

ZOOM 参加無料（ただし質問や意見を述べることはできません）

ZOOM の方は事前申込み。下記必要事項明記の上 5 月 26 日までに

申込み時の必要事項は名前、職業、電話番号、メールアドレス

申込み先 E-mail：jreikochan@yahoo.co.jp またはこちら→

アドレスに返信確認メールお送りします。アドレスはお間違えないように

当日の詳細案内：ZOOM 参加申込みされた方には 5 月 26 日ごろに ZOOM の URL 等ご案内いたします。



問合せ：携帯番号 090-2669-0413（神野玲子） E-mail：jreikochan@yahoo.co.jp

主 催：DNA 問題研究会

〈事務局から〉

▽5月28日木曜日には、日本中で汚染広がるピーファスについて、藤原寿和さんをお招きしてシンポジウムを開きます。詳細は11頁をご覧ください。▽チラシを一枚同封します。高市政権が本格的に動きだし、殺傷兵器輸出解禁や憲法改悪などきな臭くなってきました。そのような中で、なかなか目にしないことですが、「臓器移植法を問い直す市民ネットワーク」がメンバーとなっている「いのちの切り捨てに抗する市民連絡会」の集会在参議院会館で開かれます。こちらにもどうぞご参加を。

〈編集後記〉

▽今日は5月14日。ラジオのニュースでiPS細胞を使ったパーキ

ンソン病むけの再生医療製品「アムシエプリ」の薬価を5500万円とさだめて、実用化が始まる、と知った。iPS細胞の成功が2006年なので20年た。開発者である山中教授にノーベル賞が授与されたのが2012年。再生医療に関してはES細胞とゲノム編集を利用した再生医療製品の治験が欧米であいついでいて、激しい競争の中にある。多くの薬害の教訓を忘れることなく慎重にしてもらいたいものだ。▽4月10日に日本政府がゲノム編集ベビーをつくる「研究や治療」を禁止する法案を閣議決定し、現在の国会で成立する。違反すると処罰の対象になる。いままでは、ゲノム編集受精卵を人の子宮に戻す行為は、国

の指針に違反はするものの罰則がなかった。▽3月25日に山梨大学と放射線影響研究所が興味深い記者発表を行った。「クローン動物からクローンをつくることには限界が！ 哺乳類がクローン生殖できない理由が明らかに」とするものだ。ポイントは、「クローン動物には交配で生まれる個体より3倍高い突然変異が生じていた」「再クローニングを続けると有害突然変異が蓄積し、やがて限界が来てしまう」「哺乳類は種を維持するために有性生殖を選択した」というものだ。マスコミで大きく報道されたように、当方は知らずにいたが、メールで教えていただいた。大変興味深いのは、2005年に一匹のマウスの体細胞から

クローンマウスを作り、そのクローンマウスの体細胞からクローンマウスを作る「連続核移植（再クローニング）」を20年間続けたこと。当初、再クローニングは無限に続けられると考えていたが、突然変異の蓄積により出産成績は徐々に低下し、58世代目で再クローニングの限界がきたということだ。代を重ねるにつれ生命に深刻な影響を与える「重い突然変異」が増えていくことが明らかになった。クローン動物はドナーの動物と「完全に同じ」であり、再クローニングは「無限に」続けられるはずであったが、そうではなかったということである。詳細はいずれの定例会で報告しようと思う。（か）

DNA 通信 171 号 2026 年 5 月 14 日発行

カンパのお願い

当会では常時ご寄付をお受けしております。
今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

振替口座 名義:ディーエヌエーモンダイケンキュウカイ
口座番号:00140-8-605520

他機関から送金いただく場合

- 1 金融機関: ゆうちょ銀行
- 2 金融機関コード: 9900
- 3 店番(支店コード): 019
- 4 預金種目: 当座
- 5 店名(支店名): 〇一九(漢数字)
- 6 口座番号: 0605520